藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

イエス誕生の地（下）
～新約聖書の出来事④～

「ヒエロニムス」という名前を耳にされたことがないだろうか。

ヘブライ語で書かれた聖書をラテン語に翻訳した人だ。もし彼のラテン語訳の聖書がなかったら、キリスト教は今日のように世界中に広まることはなかったと言われ、カトリック教会をはじめギリシャ正教会、聖公会ルター教会などで「聖人」として大切にされている。

イエスが生まれたベツレヘムの聖誕教会に併設してカトリックの聖カテリーナ教会があり、その地下にヒエロニムスが翻訳のために過ごした洞窟がある。

二十年前に訪れた時はカテリーナ教会には行かなかったので、今回初めて教会とヒエロニムスの洞窟を見た。

ヒエロニムスは三四〇年ごろ、現在のクロアチアで生まれ、ローマに留学してギリシャ語を習得。その後、シリアの砂漠で隠遁生活を送ってヘブライ語を学ぶ。

三七八年に司祭に叙階され、エルサレム、エジプトなどで神学研究に励み、そこでラテン語聖書の必要性を痛感し、ベツレヘムでラテン語の翻訳に専念、四〇五年に完成させる。

かたわらで彼の仕事を支えたのがパウラという女性で、彼女が亡くなると、彼女の骨を机の横に置いて翻訳に専念したといわれる。

地下洞窟からカテリーナ教会の正面に出ると、そこにヒエロニムスの像が建っている。像の足元には頭蓋（がい）骨がある。聖パウラのものだ。

手元にドン・ボス社が発行した聖書があるが、旧約と新約のこの膨大な量を、ヒエロニムスは一人で翻訳した。その仕事をそばで支えた聖パウラ。古今東西、男性と女性の関係はいろいろあるが、「性」なる関係ではなく「聖」なるもの。愛でいえば「エロス」ではなく「アガペ」だったのだろう。

頭蓋骨を見ながら、アシジのフランシスコと、後にクララ会を創立する聖クララ修道女を思い浮かべた。その根底にあるのは、相手への尊敬と信頼だったのだろう。

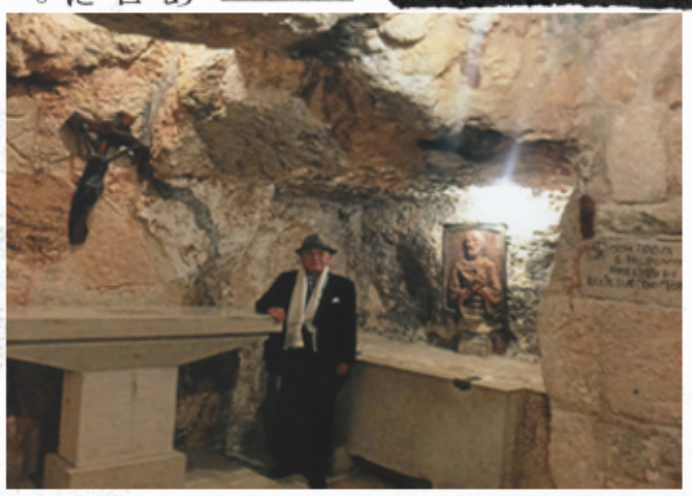
世俗の自分には無関係と思わず、聖なるものではなくとも相手への尊敬と信頼は忘れずに生きたいものだ。

さて、ヒエロニムスの翻訳で面白い話がある。イタリア・ルネッサンス期の天才、ミケランジェロの彫刻にモーセの像があるが、その頭には角がある。

現在の聖書にはモーセに角の記述はない。原因はヒエロニムスがヘブライ語からラテン語に訳した際、子音だけのヘブライ語で「輝く」というのを読み違え「角」と翻訳したからだ。

しかしこのぐらいはご愛きょう、イエス生誕の洞窟の隣りの洞窟に二十年間も閉じこもり、ラテン語の聖書を完成させたのだから、ヒエロニムスはイエスの立派な証人の一人といっても過言ではあるまい。

聖誕教会と併設のカテリーナ教会の聖堂
＝クリスマスイブにはここから多くのメディアが中継する


地下のヒエロニムスの洞窟

カテリーナ教会前のヒエロニムスの像